

中流住宅の平面構成に関する研究

第 1 4 報 北入り系列平面事例による発展過程の実証的考察 —その 2 社宅系・三井鉱山

- 正会員 宮里 義文*4 同 青木 正夫*1 同 竹下 柳和*2 同 磯貝 道義*3
同 友清 貴和*3 同 中園 真人*6 同 宮崎 信行*5 同 岡 俊江*5
同 秋元 一秀*5 同 川崎 光敏*5 同 川島 浩孝*5 同 長嶋 洋子*5

はじめに

本報以下 2 報は、九州地区炭鉱業 3 社の社宅を取り上げ、北入り住宅における平面構成の発展過程を考察する(図-1)。本報では、三井鉱山田川鉱業所及び 月山野鉱業所の社宅平面を扱う。両鉱業所とも、明治 18 年海軍予備炭田として開発が進み、田川は同 33 年、山野は同 29 年に三井鉱山株式会社の所有に移ったためである。

1 発展過程の特徴

5 室以上の役員住宅と、3~4 室の職員住宅の発展段階には、年代の差異が著しい。明治 30 年代の両事例を比較すると、図-2(役員住宅)では、脱衣室(2帖)の通り抜けによる便所・浴室への動線が確保されているが、図-10(職員住宅)では便所は床裏に位置し、動線は確保されていない。職員住宅で浴室通り抜けによる便所への動線確保が見られるのは、大正 7 年の事例(図-14)においてである。

以下、まず役員住宅について考察を行う。

2 役員住宅における発展過程

役員住宅では、前記の通り当初より便所・浴室への動線は確保されている。

STEP 2 便所・浴室への動線確保(図-2, 図-3)

図-2 では台所側から脱衣室を介して、南縁への通り抜けが可能であり、女中の便所への動線、客の浴室への動線が確保されている。しかし茶の間は玄関の間と台所の間に位置するため、女中の通り抜けの問題を持つ。茶の間と次の間の境に、狭小な板張部分が設けてあるがこれは、玄関の間から茶の間を通り抜けずに次の間へ出入りするための工夫であろう。

	社宅棟数	納屋棟数
田 川	88 (187 戸)	286 (1862 戸)
山 野	34	121

表-1 三井鉱山社宅構成 (明治 43 年現在)

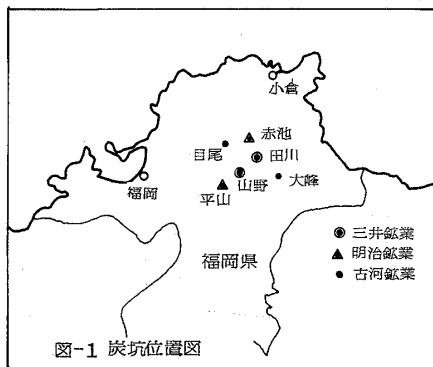


図-1 炭坑位置図

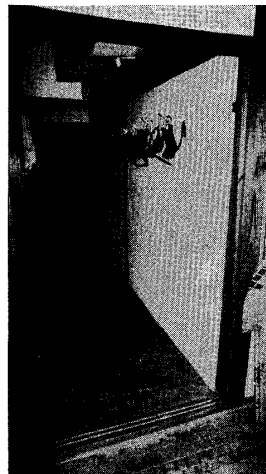


写真-1(図-5) 便所前より 2 帖脱衣室 (現状板張り) を介して、台所方向を見る。

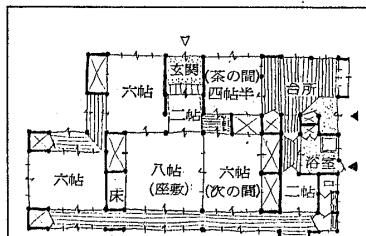


図-2 三井田川 明治 34 年

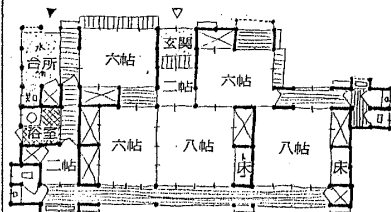


図-3 三井山野 大正 8 年

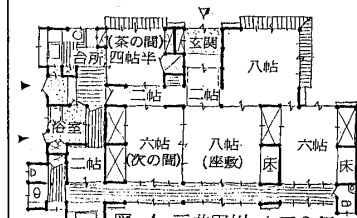


図-4 三井田川 大正 2 年

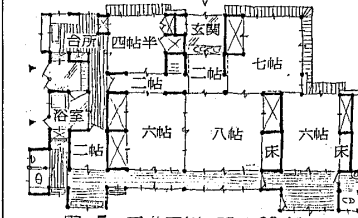


図-5 三井田川 明治 33 年

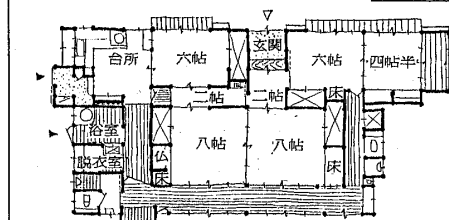


図-6 三井田川 昭和 10 年

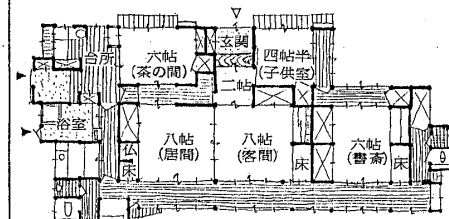


図-7 三井田川 昭和 11 年

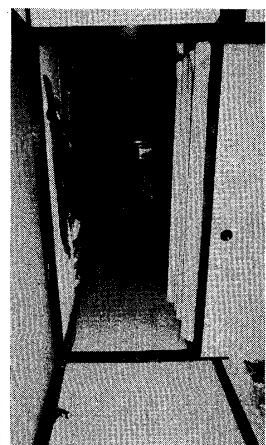


写真-2(図-4) 玄関の間より、ヨコ中廊下(タタミ)を見る。つきあたりは台所。

A Study on the Planning of Middle-class Houses

Pt.14 Positive Consideration of the Developmental Process by Cases of

Housing Plan of the Northern Entrance (2) — Mitsui C. Mining Co.

MIYASATO Yoshifumi et al.

STEP4 ヨコ中廊下の発生(図4、図5)

図4では、茶の間と次の間の間に、玄関の間から台所に通ずるヨコ中廊下(タタミ)がとられている。これにより、女中の茶の間通り抜けの問題は解決される。このように役員住宅では、タテ中廊下が空間化される(STEP3)以前に、ヨコ中廊下が発生している。

STEP5 中廊下縁の連結による動線処理(図6、図7)

図7では、タテ中廊下が空間化され、コの字型の廻り廊下(台所一部通り抜けは有る)が完成している。しかし、ヨコ中廊下の板張り化により、茶の間と次の間の連続性は介断され、また茶の間の居住性も低下する。同時期建設の事例(図6)では、タテ中廊下は板張りであっても、ヨコ中廊下はタタミ敷きである。このように茶の間と次の間の連続性はかなり意識されていたことがわかる。

STEP6 中廊下型平面構成の完成(図8、図9)

図8の事例では、茶の間は南面にとられている。また、便所・浴室が端部に位置するために、台所と茶の間は中廊下により介断される。これは設備の北面集中への過渡的段階である。

図9は、昭和14年に建設された事例である。便所・浴室は北面の玄関側に位置し、台所と茶の間の連続性も保持されている。家族・客・女中の便所への動線は、短縮され、かつ他の領域を通過する問題も無い。こうして北入り中廊下型平面が完成している。

③ 職員住宅における発展過程

次に、職員住宅では、第13報の事例と同様に、女中と家族の便所への動線や客の浴室への動線の問題の解決が計られる。つまり、図10の平面型より、図12、図14へと発展し、図16(昭和10年)の事例において、タテ中廊下が空間化される。

この段階で、室規模は、図2(明治34年)の事例に近づいており、発展段階もほぼ同レベルである。従って、次の段階として、役員住宅の場合と同様にヨコ中廊下が発生すると考えられる。しかし、役員住宅において昭和15年に北入り中廊下型平面(図9)が完成しており、職員住宅でも、ほぼ同時期(昭和17年)に、ヨコ中廊下発生によるコの字型の廻り廊下の完成という段階を経ずに、中廊下型平面が完成される(図17)。

参考文献

「日本炭鉱誌」

高野江基太郎 明治44年

「筑豊石炭鉱業50年史」

筑豊石炭鉱業会 昭和10年

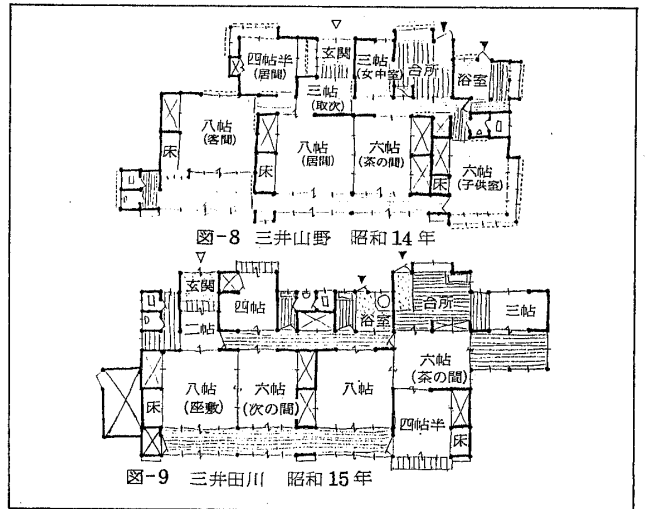


図-8 三井山野 昭和14年

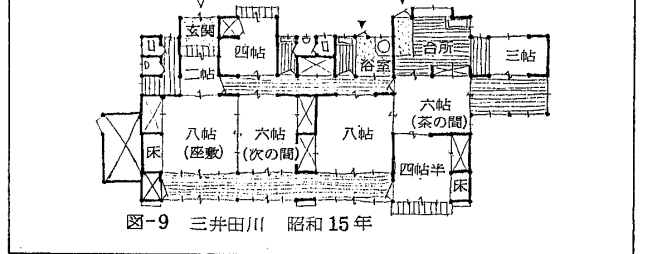


図-9 三井田川 昭和15年

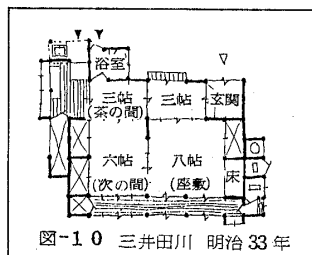


図-10 三井田川 明治33年

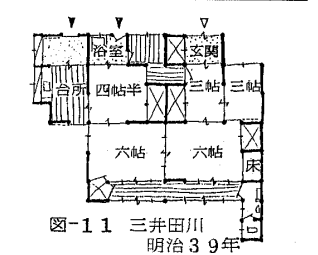


図-11 三井田川 明治39年

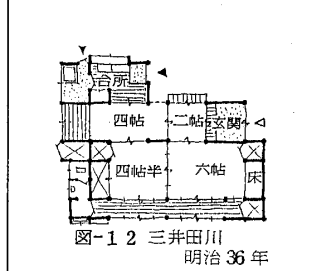


図-12 三井田川 明治36年

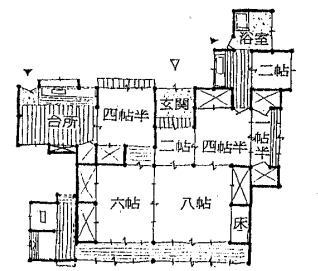


図-13 三井田川 明治37年

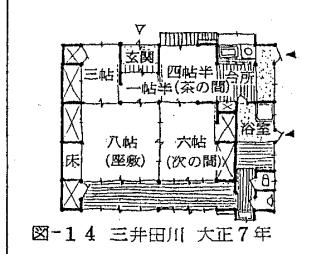


図-14 三井田川 大正7年

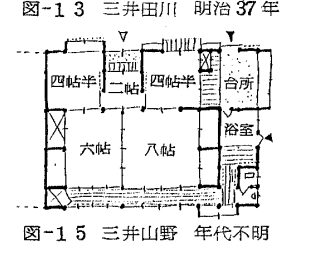


図-15 三井山野 年代不明

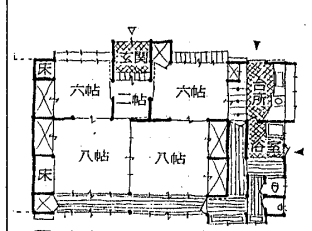


図-16 三井山野 昭和10年

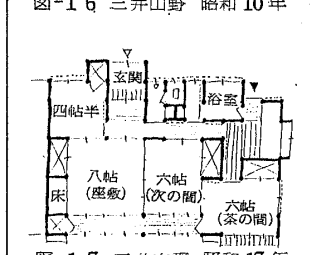


図-17 三井山野 昭和17年



写真-3(図-6) タテ中廊下。つきあたりは合所。

*1九大教授・工博 *2同講師 *3同助手 *4同技官 *5同大学院生 *6大分大助手